「成人教育運動の国際的展開」を追い続けて気づかされたこと

荒井　容子

はじめに

テーマ別社会フォーラムへの参加

先日、二〇一二年一月二四～二九日、ブラジルのポルト・アレグレでテーマ別社会フォーラム[一]が開催された。

今回のテーマは「資本主義の危機、社会と環境の正義」であり、さらに副タイトルには「ピープルズ・サミット　リオ・プラス二〇への準備」という言葉が付されていた。

テーマ別社会フォーラムへの参加を呼びかけるメッセージでは、「メッセージは一つ：私たちは世界をつくり変える必要がある」と訴え、二〇〇九年、ブラジルのベレンで開催された第七回世界社会フォーラム以後、特に二〇一一年に起こったウォール・ストリート占拠の運動、アンデス地域でのプロテストと先住民の運動、そしてアラブでの動きにも言及しながら、不平等・不正義への怒りが爆発し、社会紛争が新しい息吹を持ち始めているのだと分析していた。

世界社会フォーラムは希望するグループが自由にセッションの企画を提案し、開催していくスタイルをとっているが、その一環であるこのテーマ別社会フォーラムも同じ方法で開催され、今回は二七八のセッションが企画されたと、大会後の報告が述べている[二]。これらの中でも、大会運営委員会[三]が企画したと思われる（ＦＴＳ表記）セッションもあり、例えば二〇一二年六月にブラジルのリオ・デ

ジャネイロで開催される地球サミット、リオ・プラス二〇に向けた企画は毎日継続して設けられていた。また、他にも昼の時間帯を利用して、「アラブの春」に関するもの、ウォール・ストリート占拠の運動、アンデス地方の運動など、関係者の報告を聞くセッションが毎日、企画されていた。

国際成人教育協議会のセミナー　ＩＡＬＬＡ（イアラ）を通じての参加

私は国際成人教育協議会（ＩＣＡＥ　イカエ）がこのフォーラムと関わらせて[四]実施したセミナー、「国際成人協議会・生涯学習施策アカデミー（イアラ IALLA：ICAE Academy for Lifelong Learning Advocacy）」グラデュエイト・コースに参加し、これを通じて、同フォーラムに参加した[五]。今回のイアラのプログラムは、イアラ独自のセッションの他、イアラ受講者が分担してテーマ別社会フォーラムのセッションに参加し、その成果を持ち寄って討議するというように、フォーラムのプログラムと循環した組み立てになっていた（受講者がフォーラムのセッションでの報告者になっている場合もあった）。また討議内容も、今回のテーマ別社会フォーラムの課題、リオ・プラス二〇を世界の社会運動のエポックとして捉え、そこに向けて世界の社会運動を組織していくこと―ピープルズ・サミット　リオ・プラス二〇への準備―を中心に位置づけるものだった。

イカエはまた、今回のテーマ別社会フォーラム及びイアラに先立ち、フォーラムのテーマと関わらせて、その課題意識を成人教育の課題として引き取って議論するバーチャル・セミナー「バーチャル・エクスチェンジ」を実施した[六]。当初二〇一一年一一月末から二週間ほどの予定だったが、結局、二〇一二年一月中旬まで続き、ポルト・アレグレでのフォーラムやイアラのプログラムに直接参加できない世界各国の運動家も参加する討議の場となった。イアラのプログラムはこの「バーチャル・エクスチェンジ」での討議とも連動していた。

私はこの間「成人教育運動の国際的展開」を自分の主要な研究対象にすえ、参与観察を継続してきた。私が所属している日本の民間団体、社会教育推進全国協議会（社全協）は、イカエに加盟するメンバー組織の一つであり、私は社全協の国際活動の担当としてイカエとの連絡を取る立場にある。「参与観察」というのは、私がその立場から、社全協の国内での運動とイカエの国際的運動とをつなげる方法を模索しつつ、メンバー組織としてイカエの運動を支えることに微力ながら努めてきたからである。

ところで、今回この「バーチャル・エクスチェンジ」での討議を追い、またイアラのプログラム及びそれを通じてのテーマ別社会フォーラムに参加して、改めて考えさせられたことがあった。

それは、教育者（学校の教員、成人教育・社会教育の職員、大学の研究者・教員等々）の思想性・社会認識という問題である。当たり前の課題でありながら、教育機関への市場原理の導入によって、この重要な課題が十分自覚されなくなってきているのではないかと、改めて気づかされたのだ[七]。また他方で、教育に関わる者の思想と社会認識の深化が求められているとも感じた。

以下、自分がそのように感じた背景にある事柄をたどってみたい。

一、テーマ別社会フォーラムが提起していること

（1）「世界を変える」という思想のリアリティ

テーマ別社会フォーラムとリオ・プラス二〇

もともと、新自由主義経済の矛盾の、世界各地での拡大を焦点に据え、反グローバリゼーション運動

の息吹きを受けて、「もう一つの世界が可能だ」というスローガンを掲げ、二〇〇一年にはじめられた世界社会フォーラムは、第三世界を会場に多様な社会運動の担い手が集まり、自由に会合を企画しながら広く経験を交流し学び合っていく、そのような広場として、そのあり方を模索しながら展開してきたといえる。その一〇年の経過を経て今、二〇一二年の地球サミット―リオ・プラス二〇を迎えた。フォーラムの担い手たちは、このリオ・プラス二〇を、フォーラムがめざす「もう一つの世界」へと現実を変えていく、その大きなチャンスととらえているように思える[八]。

さまざまな「概念」の問い直し

ところで、このフォーラムでの議論においても、また「バーチャル・エクスチェンジ」においても、これまで社会運動のスローガンとなってきた概念も含め、一見美しい「言葉」、「概念」が、改めて厳しく問い直されていた。新自由主義経済による矛盾の拡大が、生活の現実のみならず、人々の内面をも浸食しているという共通理解のもとで、批判的な分析がつぎつぎと語られていた。

例えば、リオ・プラス二〇に向けて国連は合意文書を準備しているが、そこで新しい「経済」として期待を込めて使われている「グリーン・エコノミー」という概念と[九]、その経済活動の矛盾が厳しく問われていた。多国籍企業の進出で環境破壊を被ってきた国々で生きている人々は、そこに、さらに新しい収奪の姿を見抜いているようだった。

第三世界の女性の運動を組織化してきた立場からは、女性の運動が生み出してきた「エンパワーメント」という概念が、他分野への広がりの一方で、矛盾を抱えてきていることが、ジェンダー・バッシングの継続問題と合わせて指摘された。「開発」という概念への批判は古くからあるが[一〇]、改めてこの概念への批判も出された。資本主義経済はもとより、「国家」という存在自体への疑問が、フォーラ

ムの準備過程で話題となったことも紹介された。

そして「持続可能」という概念さえ、単純にとらえきれないことも示唆されていた。

（なお、特に特徴的ということではないが、「消費主義」への批判が提示される一方で、「消費主義」との対比において、古代文化や先住民族の文化が内包している価値観を重視する言及や、「ケア」概念への注目も提示された。）

批判・問い直しの主体的受容の問題

しかし、大会実行委員会が企画した早い時期のセッションで、大会準備の中心的担い手と思われるセルジオ・ハダッド（ブラジル）は、パネリストの一人として「グリーン・エコノミー」の問題に言及したおり、「直面している課題は、自分たち『市民社会』の課題でもあるのだ」とも語っていた。

問題点を指摘するだけでなく、問題を乗り越える新しい「経済」を切り開く課題を、「市民社会」の側から取り組んでいかなければならないという意味ではないかと私は受け止めた。

またイカエはフォーラムの中で、「世界教育フォーラム」（の母体）と共同セッションも企画したが、そのなかで、教育への市場主義の思想的浸透を激しく批判する報告者に対し、今回のイアラの受講生等から、「自分の子どもが、アイスクリームを買ってほしいといったら、単純にダメとはいえない。どう説明すればいいのか。」、「自分たちは生きていかなければいけないから、市場主義批判をいくらしても、その議論は空疎に思える」、「自分は大学を出ても就職できず、コーヒーショップでしばらく働いていた。市場経済に乗って生きていくしかない現実がある。」と、次々と批判的な意見が出された。みな、それぞれの国で、貧困問題等、社会問題に格闘している運動家たちだ。しかし報告者は応戦した。彼女がどのように応職したのか、スペイン語から英語への翻訳で、正確には聞き取れなかったが、問

題を直視し続ける必要性を語っていたように思われた。

実はこのセッションの前からイアラの話し合いでもすでに、市場主義の中で痛めつけられているという実感と、その中で生活しているという事実との間でそれぞれが抱える矛盾が、少しずつ話題となっていた。ここではそのような思いが、改めて表出したのだと思うが、私自身、このセッションで改めて、イアラ受講生の間に、それぞれの生き方にも関わって、共通する切実な問題意識があることを、改めて自覚させられた。

（2）市民社会組織の結集により、国際会議の討議を変える

リオ・プラス二〇に向けたピープルズ・フォーラムという戦略

イアラのプログラムの中の、独自のセッションでは、イカエに関係するさまざまな活動家が報告をしてくれた。一九九二年の地球サミットに参加し、イカエと関わらせて環境教育の運動を展開し、以後活動を続けている社会学者のモエマ・ヴィエザ、共に活動しているモニカ・シモンズ（ともにブラジル）、ソーシャル・ワッチの運動を継続しているロバート・ビスィオ（ウルグアイ）、第3世界の国々の女性運動のネットワークDAWNを組織しきてきたジジ・フランシスコ（フィリピン）等々。特にモエマ・ヴィエザは一九九一年のリオ会議の息吹きを伝えてくれた。そしてロバート・ビスィオは当時とその後二〇年の間の世界情勢、国際関係の変化について説明した。

先に紹介した、このフォーラムの中心的な担い手、セルジオ・ハダッドも、イアラのセッションで報告者となった。彼は、リオ・プラス二〇での政府間会議と対応させて自分たちが準備しているピープルズ・サミットの目的・意義を説明し、それに向けて運動を広げていく必要を語り、私たちに行動

を呼びかけた。

新自由主義のグローバルな展開の中で生み出されている現在の悲惨な状況を変えていくために、すなわち、世界社会フォーラムが「可能だ」と訴えてきた「もう一つの世界」へ「地球」を変えていくために、リオ・プラス二〇は重要な機会となる。しかし、この国連会議（地球サミット）での予想される政治情勢は厳しく、これを動かすには市民社会組織の結集が必要だ。ブラジルの大統領はおそらく孤立するだろうから、これを支え、市民社会組織の要求を、この会議の成果に反映させなければならない。これが彼の主張の要点だろうと思われた。

フォーラムの担い手たちがブラジル大統領ディレマと一体化しているとは思えない。ルーラ大統領のときもそうだ。むしろ、大統領を支えつつも、緊張感をもって自分たちの主張を提示する、という姿勢を保っているように思われる。

世界社会フォーラムで毎回行われているのかどうか、今、確認する余裕がないが、これまでも、フォーラムでは市民社会組織と大統領との対話というセッションがプログラムに組み込まれてきた。今回はテーマ別社会フォーラムのため、通常のものに比べてその位置づけは低くなると思われるが、今回も大統領との対話というセッションが持たれた（今回はウルグアイの大統領も参加予定だったが、実際にはディレマのみの出席となった）。「対話」といっても実態は大規模なイベントのようなものだったが、ディレマは市民社会組織の運動と呼応する演説を展開した模様で（当日は通訳がなく、ポルトガル語での演説だったため、国連へのパレスチナの加盟を応援するというところのみしか聞き取れなかった）、ブラジルの「現」大統領も、市民社会組織の運動との強いつながりをもっていることを感じさせるものだった。

この点からもセリジオ・ハダットの提案にはリアリティがある。

ブラジルの大統領がどれだけ頑張れるかにかかっているから、市民社会組織はそれを支える必要がある。市民社会組織の声を伝えて、地球の未来をよい方向につなげられるように、彼女に踏ん張ってもらわねばならない。だから、みんなでピープルズ・サミットに結集して欲しいということなのだ。

国を越えた市民社会組織の連帯によって国際政策を変えるという手法

ユネスコ主催の会議、国際成人教育会議では、第五回においても垣間見ることができたが、とりわけ第六回のベレン会議では、イカエと、またイカエと関係するリージョン組織とが、各国のメンバー組織と連繋し、国を越えた運動を展開していく様子を、私自身その一人の担い手として実体験した。共通の変革課題を実現すべく、大会でまとめられる合意文書の内容作成に影響を与えていく。市民社会組織の国を越えた連携・連帯により、世界の成人教育施策の方向に影響を与え、これを通じて各国の成人教育政策に影響を与えようという試みである（なお、すでに別の拙稿や研究発表で明らかにしたように、第六回ベレン会議ではさらに、会議の準備過程を活用して、国内の運動と政策を揺り動かす仕掛けもつくっており、この点は合意文書の作成・実現という軸で動いていく戦略にとどまらない、あるいはその限界を越える手法の導入でもあった）。

この点では、今回のセルジオ・ハダッドの提案はこれまでの運動と類似の戦略のようにも思えるが、しかし、自分たちの国以外の代表に、他の複数の国々の社会運動が、あるいは市民社会組織が、連帯して、その要求を託し、結集するという、この提案がもつ構造は、私にはとても新鮮に感じられた。

しかも、リアリティをもって、感じられた。

今回のイアラに、受講生として参加したのは一六名。一二か国からの参加である。協力者として数名が出入りしていたが、それらの人たちの国も数えれば一四か国だ。

ここで、異なる国の成人教育に関わる活動家たち、それぞれの国の社会問題を見つめ、それを教育の課題として引き取り、考え、実践している人たちが、自分たちが直面している課題を語り合い、議論しあった。私が二〇〇四年に参加した第一回イアラにおいても、同様の経験をしたが、今回、受講生自身が報告者となって語り合うセッションが、以前よりもより本格的に、多数設けられ、また、グループごとに準備して行う発表も、異なる国の受講生同士の組み合わせで、より本格的に組み込まれていた。そこで数日間というわずかな期間ではあったが、改めて、それぞれの国の現実と気分をリアルに感じ、気づかされ、学ぶことが多く、市民社会組織として、共通の願いをもって運動を進めているという連帯感を以前にも増して感じることができた。このような経験の中で聞いたセルジオ・ハダッドの提案は、私にとって、そしておそらく私たちにとって、可能性を抱かせるものに思われたのだ。

しかし、提案を受けて、それぞれの国で関心を広げ、運動を起こすことは簡単ではない。セルジオ・ハダッド自身が、この運動を広げていくためには周りにある団体、一つ一つに声をかけ、ステップ・バイ・ステップで、進めるしかないと、イアラでの報告をまとめていた。

もうすでに時間はなく、特に、社会教育関係者でこの「リオ・プラス二〇」を運動の課題として強く自覚している人は多くない。私自身、今回のイアラに参加するまで、その意味をそれほど自覚していなかった。むしろ私自身の関心は、ユネスコ第六回国際成人教育会議フォローアップ活動をどう進めるかに向いていた。今、直近ではこの課題に迫られている。自分が担わなければならないという自覚もある。

帰国してから、渡航前にやり残したこと等、さまざまな仕事に追われながらも、改めて関連するウエブサイトを調べつつ、「リオ・プラス二〇」に向けてどのような活動を展開すればいいのか、時間とのにらみ合いの中で、今なお模索中である。

そのような非力を省みずに考えるのだが、もしフォーラムの投げかけに賛同するなら、私たちは、それぞれの国でこの「リオ・プラス二〇」の意味・理解を、市民社会組織の立場から深めていく必要があり、その上で、一方では政府に働きかけ、また、他方では、「リオ・プラス二〇」の政府間会議そのものに働きかけるべく、ピープルズ・サミットへの結集（直接参加するだけでなく、多様な意味で）を呼びかけるという、二つの方向でのアプローチが必要なのであろう。

二、成人教育運動と社会運動との関係—国際的展開の中で

（1）成人教育運動と他の社会運動との関係—国際的運動とのかかわりで

第五回国際成人教育会議からイカエ第六回世界大会へ

ところで、改めて振り返れば、すでに第五回国際成人教育会議はその合意文書の中で、「成人教育は二一世紀への鍵となる」と主張していた。この合意文書「ハンブルク宣言」は、これに続けて次のように述べている。

「成人教育は行動的な市民性が生み出したものであり、また社会における完全な参加のための条件でもある。生態系からみて持続可能な発展を強化するために、民主主義、正義、男女間の公正さを、そして科学と社会と経済の発展を促進するために、さらに、暴力的対立が対話と正義にもとづく平和文化に置きかえられる世界を築くために、成人教育は強力な概念である。成人の学習は主体性をつくり、人生に意味を与えることができる。生涯を通した学習は、年齢、男女間の平等、障害、言語、文化、経済的不均衡の要素を反映した内容について再考することをともなう」（「成人の学習に関するハンブ

ルク宣言」一九九七年　藤田秀雄・荒井容子訳より。『月刊社会教育』一九九七年一二月号所収）。

この第五回会議はNGOが大きくかかわった会議であり、この会議を仕切ったユネスコ教育研究所（当時）の所長は、第四回会議（一九八五年）当時には、イカエの北米リージョンを代表する副会長、ポール・ベランジャー（カナダ）であった。その点からも第五回会議とハンブルク宣言は、イカエの関わりが強いものだったと想像される。また、会議中に合意文書が修正されていく過程では、会議のプログラムの合間を縫って、イカエが関係者の会議を何度も開催していたことを、同会議に参加した私自身も直接見聞している。

その後、イカエは財政問題で存続の危機に陥り、会長にポール・ベランジャーを迎え、イカエの現事務局長セリータ・エーカー（ウルグアイ）を財政担当として、危機を乗り越えていく。そうした改革過程の中で、二〇〇一年八月にジャマイカのオチョリオスでイカエの第六回世界大会が開催された。そこでまとめられたオチョリオス宣言では、「ハンブルク宣言」では明記できなかった、グローバリゼーションへの批判が、その矛盾の深まりの確認の下で、成人教育の課題と結び付けてはっきりと宣言された。

「私たちは正義と民主主義による、そして相違を尊重する新しい国際社会の形成を夢見て、ここオチョリオスに世界中から集まった。しかし、私たちは、経済的グローバリゼーションが、至るところで、次々と絶え間なくうみだされてくる疎外された女性・男性の間に欲求をつくりだしながら、持てる者と持たざる者の格差を広げていること、また環境を悪化させていることを知っている。経済的グローバリゼーションは学習を捉える視点を集団的視点から個人的視点に変更させる。この流れは、ジェンダー、人種、障害、階級、宗教、性の傾向あるいは個人としての性の選択、年齢、言語的・民族的相違、これらにもとづく多様な形態の差別を拡大させている。この流れはまた、先住民、難民、移民、

避難民に対する差別も拡大させている。／私たちは、世界の隅々から来た人々が、ポルト・アレグレ（ブラジル）、イエーテボリー（スウェーデン）、ケベック・シティ（カナダ）、ジェノヴァ（イタリア）などに集い、世界経済を動かす人々によって示された方向性に対して、強い懸念を表明したことに注目している。また、同時に、私たちは活発な市民活動が生まれつつあること、また地域での草の根の活動がグローバル化に挑戦する際に重要となっていることに注目している。今、私たちは、真に民主的で持続可能な学習社会をつくれるのではないかという可能性と、経済のグローバル化があらゆるところに生み出している無抵抗や貧困、弱者へのしわ寄せ、混乱との間のジレンマに陥っているのである。私たちは、すべての種類の差別が消滅し、平和が現実となる公平な世界を実現すべく働くことを約束する」

（「オチョリオス宣言」。藤田秀雄・野元弘幸・荒井容子訳『月刊社会教育』二〇〇二年一月所収）。

今、改めて読み返してみると、そこに、二〇〇一年に始まった世界社会フォーラムの息吹が反映されていることに気づかされる。

イカエと世界社会フォーラム

ところでしかし、イカエは、「成人教育」分野がこの世界社会フォーラムの運動の中で埋没しているという意識をもっていた。その後、イカエの事務局長になったセリータ・エーカーは二〇〇四年八月の第一回イアラで、二〇〇四年一月の第三回世界社会フォーラム（インドのムンバイで開催）に参加して、とてもみじめな思いをしたのだと、受講生に語っていた。

その年の秋、セリータ・エーカーは二〇〇五年一月にポルト・アレグレで開催予定だった第五回世

界社会フォーラムに向けて、成人教育の運動団体が協力して会議を設けることを、メンバー組織に正式に訴えた。しかし日本の社会教育関係者の間では、世界社会フォーラムのことはほとんど話題になっていなかったため[一二]、私はセリータ・エーカーに頼み、私が所属しているメンバー組織である社全協の委員長に向けて手紙を書いてもらった。そして私はこの手紙を日本語に訳し、社全協の委員長に送付して、団体としての参加協力の検討を求めた。結局、社全協としての参加はかなわなかったが、そのときセリータ・エーカーが書いてくれた手紙の中で、彼女は、イカエがこの世界社会フォーラムに積極的に関わっていく理由を二つ書いていた。一つは、成人教育の意義・価値を他の分野の社会運動関係者に認識してもらうため、もう一つは、成人教育運動の関係者が視野を広げ、他の社会運動と連携していくことを促すため、ということだった[一三]。

私は、成人教育の国際的運動の思想性等に魅力を感じ、興味をもっていたとともに、国内の社会教育の運動と国際的な運動をどのようにつなげていけばいいか、国際的な運動は国内の運動を進めていく上で、どのような形であれば役にたつか、そのような一般的な研究課題ももって（そこにはそれまでの研究動向に対する批判意識もあった）、少しずつ、成人教育運動の国際的展開に関する研究を進めていた。しかし、それだけでなく、二〇〇四年四月から二年間の在外研究に取り組むにあたって、私の中にはもう一つ課題意識があった。当時私は、国内の社会教育の運動に限界[一四]を感じており、これを乗り越える課題として、国内の運動はもっと国際的な運動と積極的に関わっていく必要があるのではないかと直観していたのだ。

そこでセリータ・エーカーのこのような説明は、改めて自分のその直観を問い直しつつ、深めさせてくれることになった。すなわち、国内の社会教育運動の「限界」を乗り超えるためには多様な分野の運動と連携し、視野を広げる必要があるということ。しかし、その課題と方法は国際的な運動にお

ける課題と方法に通底し、また連動しているということだ[一五]。

(2)「教育」「教育者」に浸透する市場主義にどう向き合うか

ところで今回、イアラと、またテーマ別社会フォーラムに参加して、セリータ・エーカーが以前に、成人教育運動の関係者はもっと他の社会運動と連携して、視野を広げていく必要があると書いていたことの意味を、改めて自分の中で深めることになったのではないかと感じている。

市場主義、新自由主義が、人々の内面に深く浸透していけば、内面化された市場主義、新自由主義は、人々に競争をあおり、そして「収奪」を良しとする政策を支持させてしまいかねない。この流れは、一人ひとりの日々の生活の中で育まれてしまう。「バーチャル・エクスチェンジ」では、このような理解の下で、この流れを変えるには「教育」の力が大きいと、論じられていた。

しかし他方で、現実には「教育」をめぐる諸政策そのものが、その市場主義、新自由主義の論理で、財政削減等によりゆがめられている。

今回のフォーラムで注目されたチリの学生たちの運動や「バーチャル・エクスチェンジ」で紹介されたコロンビアの学生たちの運動を、私はまだ正確には分析できないが、これらの運動は、大学の授業料問題にとどまらず、大学経営への市場主義の浸透を批判する運動としてその輪を広げており、つまりそれらは「教育」の場を通しての市場主義・新自由主義の拡大に対する警告としても注目されるのではないかと思われる。

研究者としてのみならず、教員とて大学に身をおく立場から自らを振り返れば、確かに、大学の経営が国内のみならず国際的な動向も念頭におきながら、「競争」にあおられる状況が、この間、強くなってきているように思われる。「産学共同」という言葉への抵抗感がほとんどなくなってしまい、大学が

経営のために「収益」活動をすることが、むしろ推奨されている感さえある。国立大学の法人化はこの流れを大きく前に進めてしまったのではないだろうか。

社会教育分野でも、社会教育施設に「指定管理者」制度が導入され、株式会社が指名されても構わなくなった。「営利企業に任せていいのか」という疑問は、「保守的」な発想として排除されていった。「良い」サービスを「安く」提供できるのだから、何も悪いことはない。批判するのは、イデオロギッシュな者たちだけだと揶揄されかねない。そしてこの動向は世界中に広がっている。

しかし、フォーラム等での議論は、この動向の世界的広がりの一方で、疑問を持ちつづけている、あるいは新たに矛盾に直面してその疑問を強くしている人たちも、各国政府が競争相手としているそれぞれの国の中に、共通して存在しているということだ。

「バーチャル・エクスチェンジ」の議論を追っていて、私は、改めて「教育」に携わるものとして、襟を正させられる思いに駆られた。「教育」に携わっている者は、世の中の大きな流れに影響を与えるものとして、かつてはもっと誠実に生きていたのではないか。目の前の生徒や学生に向き合い、住民に向き合いながらも、その先に、人々が生きていく社会の諸問題を見通して、教育活動に携わっていたのではないか。自分の教科、講義の分野を越えて、自分の担当する地域を越えて、社会の未来に責任を感じていのではないか。

かつても今も、責任を感じる者と感じない者がいるのだという説明もありうるかもしれない。しかし、市場主義の流れはいわゆる「公共的」なものにどんどん浸透していき、すべての人の権利である「人権」と権力との対抗関係を見えにくくしてしまった。対価を支払う能力のあるものたちの間での限定的な「権利」とその保障が、権力装置を通じて優先されてしまっている。

実は、「リオ・プラス二〇」でのピープルズ・サミットへの結集を訴えたセルジオ・ハダッドも、運

動の中で「仕事を選ぶか、運動を選ぶか」というジレンマが語られることがしばしばあるのだと、イアラでの報告を終えたあとの討議の中で吐露していた。世界社会フォーラムとイカエの共同企画によるセッションで、新自由主義の問題を訴えた報告者に対し、イアラのメンバーが次々と批判を述べたと前述したが、私はセルジオ・ハダッドのこの言葉を聞いて二日前のこのセッションのことを思い出し、そして思わず発言した。若干、言葉にできなかった表現も含めて今、書いてみると、次のようなことである。

「私たちはさまざまな矛盾を抱えている。市場経済の矛盾を感じながらも、市場経済の中で生きている。しかし、そこで生きているからといって、矛盾を指摘してはいけないということではないだろう。矛盾を感じていてもそれを指摘せず、そのまま事態が進行することを、ただ黙って、あるいは開き直って肯定し、自分の教育活動をやり過ごしていいのだろうか。

批判を語れば語るほど、実際の自分の置かれた立場や日常生活は矛盾しているではないかという苦しみが自分に突き刺さってくる。しかし、教師は、その苦しみも含めて、そのことを語ることはできるのではないか。自分は理想通りに生ききれていないけれども、本当はこうであってほしいのだ、今、自分も一生懸命もがいているのだと、生徒や学生たちの前で「語る」ことはできる。それはもしかしたら教師の特権かもしれない。ビジネスマンや行政職員には、仕事の実態とは違う自分の思いを、仕事の中ではなかなか語ることができないかもしれないけれど[一六]。

また『教育』という分野は、他の分野と比べて、全体的な視野をもつこと、その視野をもって語ることを肯定的にとらえられやすい分野でもあるのではないか。

すなわち、教師は、矛盾を抱えながらも、社会全体を捉える『理想』を語ることが許され易いという『特権』があり、それを活かす責任があるのではないか。

これらのことは今回のテーマ別フォーラムや『バーチャル・エクスチェンジ』で私が学んだことだ。セルジオが午前中の報告で、運動の進め方としてステップ・バイ・ステップと語っていたように、矛盾を抱えていても『理想』を語るということは、ステップ・バイ・ステップの前進につながるのではないか。」

三、教育者の思想性・社会認識の問題―「理想」と世界認識

(1) 大学での講義を通じて

特講「社会を変えるための実践論」を通して

二〇一一年度の後期、私の職場の学部で、多数の同僚とともに特講「社会を変えるための実践論」(計一五回　実質一四回)を実施した。今、政策的に推奨されている「キャリア教育」について、前年度、主任の教員が、就労教育のようなものにはしたくない、学部なりに工夫して、学生たちが「市民」として生きていく力をつけられるような講義にしたいという思いを語り、同僚たちがこれを受け止めて、九人の教員で企画した。タイトルをどうするかについては、「市民運動」、「社会運動」、「シティズンシップ教育」等々と二転三転し、ようやく、この少しもたもたしたタイトルに確定した。担当コマ数の関係もあって、私が全体を取り仕切る役に指名された。実は、教授会でこのようなタイトルの講義を特設する提案が通るかどうか心配だった。二、三の質問もあった。しかし、九名の思いが通じたようで、「やってみろ」という雰囲気で承認された。この講義は、多様な学問背景をもつ教員たちが各回を交代で担当する講義であり、また教員自身が自分を語り、かつ学生同士の討議(教員も一緒になって)と全体討議というバズセッション方式もできるだけ導入するという、運営方法での挑戦もかねていた

一七。

ところで実は、この講義の最後の方で、私は世界社会フォーラムのことを取り上げ、「もう一つの世界は可能だ」というスローガンをどう思うかと、学生たちに投げかけてみた。

現状批判のスローガンよりも、もっと未来をみつめるという意味で、積極的な姿勢を感じ、好い印象をもったと、一人の学生が語ってくれたが、全体としてはピントこないという反応だった。ラテンアメリカの息吹きの中でこの言葉に触れた私には、夢や希望を持たせてくれるようなスローガンとして受け止められるように思えたので、そのような感想が少なかったことで、改めて考えさせられた。

コース入門科目「人間・社会論」を通して

また、私は学部のカリキュラムの中に七つ設けられているコースの一つ、「人間・社会コース」の、その入門科目、「人間・社会論B」という講義を、二〇〇七年度から三年間担当したことがあった。自分で「社会問題を感じ取る力」というテーマを設定し、レイチェル・カーソンのセンス・オブ・ワンダーからはじめて、ワーキング・プアー問題、コロニアリズム、パウロ・フレイレの識字教育実践、見城慶和先生の夜間中学での実践、死と生の問題、最後にルソの『社会契約論』と『エミル』を取り上げる構成で行った。「コロニアリズム」の回では、ファーノンの『地に呪われたる者』を取り上げたが、その準備過程で、パレスチナの小説に出会った。本橋哲也『ポストコロニアリズム』(岩波新書二〇〇五年)に紹介されていたガッサン・カナファーニ「太陽の男たち」(邦訳『太陽の男たち/ハイファに戻って』河出書房一九七八年)という小説だ。パレスチナで生きる青年たちの、鬱屈とした気分が如実に描かれていた。

このような抑圧的な統制下に生きる者の精神的な苦しみが、実は現在の世界構造の中で、第三世界の国々に生きる人々の底流にあるからこそ、「もう一つの世界は可能だ」というスローガンはより魅力

的に響いたのかもしれない。また、このスローガンは一九七〇年代から八〇年代はじめまで軍事独裁体制下で苦しんだラテンアメリカの国々の人々、その独裁体制と戦ってきた人々にとっては、当時の思いとも通じるスローガンなのかもしれない。

(2) フォーラム、イアラでの出会いから

今回の旅で、ホテルで同室になったパトリシアはコロンビアの首都、ボコダで育った女性で、かつてセリータ・エーカーが代表を務めていた、ポピュラーエデュケーション運動のラテンアメリカ諸国のネットワーク、REPEM（レーペン）の現在の代表だ。コロンビア国立大学で社会学を教えている。農村の女性問題を研究していたという彼女の今の研究テーマはコロンビアの炭鉱問題だという。「コロンビアは麻薬とマフィアという悪いイメージしかもっていないでしょ。でも気候はとても穏やかで、自然も豊かで、水も豊富でとてもいいところだったの。しかし石炭を採掘する外国資本が進出して、山が丸裸にされてしまった」。そういいながら、彼女は自分が調べている鉱山の写真、緑豊かな山が変わり果ててしまったその変化をパソコンで見せてくれた。

このコロンビアでは、大学に進学できる層は少なく、公立大学の学費は無料で、かつては住宅や食費の援助もあったという。ところが進学人口が増える一方で、そのような援助は次第になくなり、今回、ついに学費有料化につながる施策が政府から示された。そこで学生たちが反対運動に立ち上がった。以前から、大学経営への市場経済導入に対して問題を指摘する学生たちの運動が細々とあったようだが、今回は私立大学の学生たちも、この施策はやがて自分たちにも影響がでると考え、共同で立ち上がった。そしてこの学生たちの運動の盛り上がりによって、これまでパトリシアたち、大学関係者が警笛を鳴らしていた大学経営への市場経済導入問題が、ようやく大きな社会問題として取り上げ

られはじめたという。

パレスチナで学校の教員をしていたという、イカエのメンバー、レファット・サバは、パレスチナでの経験を、今回のフォーラムの複数のセッションで語り、パレスチナ問題の重要性を訴えていた。彼はこのイアラのセッションでも語ってくれた。パレスチナ問題の解説とその問題の深刻さ、パレスチナの人々が被っている理不尽な状況を伝え、この問題が世界的課題であることを訴えた。しかし同時に、学校では子どもたちに自由な活動をうながしていること等々、その楽しい教育実践や、自分の母親が抑圧的な社会の中でも、いろいろな顔を使ってしたたかに生き抜いている様子を子どもの頃から見ていたと、その体験にも触れた。パレスチナの人々は、多くの家族や知人が殺されているし、海外に行こうにもなかなかビザがおりず、入国時にも「危ない」人物というレッテルを貼られて危険視されると、この国際会議の参加者には分かりやすい不愉快な体験事例を紹介したうえで、そうした中でもパレスチナ人は、笑ったり、楽しみを見つけたりして生き抜いている、「ライフ・イズ・ビューティフル」なんだと映画タイトルを使って語った。

震災のあと、なかなか復興につながらないハイチからも、成人教育のファシリテーターをしているパトリスが、イアラ受講生として参加した。震災のときの酷い被害の様子、厳しい現状を、パソコンで写真を写して報告しくれた。フォーラムの大きなセッションでは、ハイチから参加しているということで多くの参加者に賞賛され、急きょ舞台に呼ばれた。彼はその舞台で一言語ったあとハイチの民謡を歌った。イアラのセッションでは労働歌を歌ってくれた。彼はその舞台で一言語ったあとハイチの民謡を歌った。イアラのセッションでは労働歌を歌ってくれた。彼は一方でまた、上手にイアラ関係者たちの物まねをしてみんなの笑いをとる愉快な青年だった。

ボリビアからは、女性運動のNGOスタッフ、モニカも受講生としてイアラに参加した。彼女は、ボリビア政府が多様な市民社会組織とともに新しい憲法をつくっている、現在進行中の過程を生き生

きと紹介てくれた。憲法づくりは、女性分野に限定されない。さまざまな分野の運動組織と連携しなければならない。そのことに、大変さとともに面白さも感じていると語った。他方でまた、独裁政権を倒して自分たちでつくりあげた政府だが、その政府との交渉過程では、「国家」の本質が見え隠れし、問題として感じられつつあることも、さりげなく語っていた。

世界の多様な国々の中で、民衆の中に、既存の世界構造に起因する抑圧された気分があること、他方でまた、その抑圧した気分を乗り越えていく、民衆の生き生きとした動きがあること、このようなことを知ることは、改めて、国内にあるそのような気分・構造と、それを乗り越えていく動向とを、世界的視野でふりかえらせてくれるようにも思う。

「教育」に携わるものは、目の前の生徒や学生や住民・地域に対し、社会全体を捉えたその「理想」を投げかけ、さまざまな形で、討議を組織していく必要があるのではないか。そうすることで、はじめて「教育」に携わる者として位置づけられてきたその役割を果たすことになるのではないか。

そして、どのような社会を構想するかというその「理想」は、世界を視野に入れてとらえ返すことで、内面化された市場主義を対象化させるという、もっとも厳しい課題を、乗り越える力になるのではないか。

まだまだもたもたした表現しかできないが、今、私は、そんなことを「問い続けている」。

註

一　これは世界社会フォーラムの一つとして企画・実施されているものである。

世界社会フォーラムは世界の多様な社会運動が、自由に集まって議論していく会議で、反グローバリゼーションの運動と連動して二〇〇一年から開催されてきた。毎年、先進国の要人が非公式に集まって国際経済の行方について討議する世界経済フォーラム（スイスのダボスで開催）に対抗し、同時期に開催されてきた。当初は毎年開催されてきたが、現在は三年に一回の開催となっている。またこれと並行して、開催時期をずらして、リージョン別の社会フォーラム、テーマ別の社会フォーラムが開催されてきた。今回私が参加したものはこのテーマ別社会フォーラムである。今回の開催都市ポルト・アレグレは第一回から三回、そして第五回と頻繁に開催されてきた、世界社会フォーラムゆかりの地である。

二　http://www.fstematico2012.org.br/　二〇一二年一月三一日付の最初の記事より。

三　このような表現が正しいのかどうか、今は定かでない。

四　イカエは世界社会フォーラムと当初からさまざまなつながりをもっていたが、特に二〇〇五年一月の第五回大会からは、多様な社会運動が出会うこのフォーラムで「成人教育」の重要性を強調すべく、他団体とともに多様なセッションを実施し、マーチでのパフォーマンスにも力を入れ、それまで以上に積極的な取り組みをしてきた。

この視点は二〇〇九年一二月に実施された第六回ユネスコ国際成人教育会議にも大きく影響を与えたといえる。なぜなら、同会議はブラジルのアマゾン地域の都市、ベレンで開催されたが、二〇〇九年一月にはこの同じベレンで第七回世界社会フォーラムが開催されていた。これを偶然とは言い難い。また同会議の直前には、世界社会フォーラムと同様の手法によって、同じベレンで、成人教育に関わる世界市民フォーラムも開催された。なお、イカエは二〇一一年六月に第八回世界大会をスウェーデンのマルメで開催しているが、その前の第七回世界大会は二〇〇六年一月末にケニアのナイロビで開催した。実はその場所は、はじめてアフリカで開催された第六回世界社会フォーラムと同じであり、またこのときは、イカエの世界大会の開催日もこのフォーラムの直前に設定され、世界大会参加者がそのまま世界社会フォーラムにも参加するように、プログラムが組まれていた。

そしてイカエは今回のテーマ別社会フォーラムでも、世界教育フォーラム関係者との共同による企画等、大きなセッションを

複数企画・実施するなど、積極的にこのフォーラムを担っていた。

五 イカエは、その運動を展開するために、国内に運動基盤をもってイカエの活動と連携する活動家を要請することを目的に、二〇〇四年七月から、このセミナー「イアラ」をほぼ年一回のペースで実施してきたが、今回はじめて、これまでのイアラ参加・修了者を対象に企画・実施したのが、このグラデュエイト・コースであった。

六 バーチャル・セミナーはeメールを活用して討議を組織していく方法で、イカエはその組織内の重要なグループであるジェンダー教育事務所（GEO Gender Education Office）が中心となって、早くからこの方式での討議を行い、その方法を洗練させてきた。GEOの経験を踏まえて、イカエとして行ったバーチャル・セミナーとしては、二〇〇七年一月のイカエ第七回世界大会に向けて二〇〇六年に開催されたイカエ組織のあり方についての討議、二〇〇九年のユネスコ第六回国際成人教育会議に向けて二〇〇八年、二〇〇九年と三回にわたって行われた討議がある。今回はバーチャル・エクスチェンジと命名されているが、今回も同様の方式がとられている。

七 もちろんこの重要な問題を自覚している教師たちが、今、裁判等で闘っているのだともいえる。しかしその闘いは厳しい状況にあり、教員への思想的攻撃が過激になっている。これは「思想」「社会認識」の問題についての教員全体の意識の後退と、他方で教育及び教員に対する、そのような点での人々の期待が後退しているために、「教育」の場、人々が学ぶ場への外からの思想攻撃の意味・危険性を、多くの人が十分自覚しきれずにいるということなのではないか。

八 この運動を進めてきた立場からは、二〇一一年の「新しい」運動は、まさに「資本主義経済」の危機の深化・新自由主義による矛盾の広がりの中で、「怒り」の運動として展開したのだと位置づけられ

ている。「アラブの春」など、さまざまな角度からの分析が必要であろう。しかし、このようなとらえ方は、二〇一一年の「新しい」運動の本質をとらえる理解なのでないかと、私は感じている。

九 合意文書のゼロドラフト（英語版）が二〇一二年一月一〇日にウェブサイトで公開されている。そして国連は各国政府に、準備会議のための事前のコメントを送付することを求めている（http://www.uncsd2012.org/rio20/ 参照）。

なお日本では外務省がそのウェブサイトにわずかな紹介ページをもっているが、そこでは二〇一一年七月に準備委員会が設立されたとの情報を伝え、そのサイトをもっている三菱総合研究所のページにリンクをはっているのみである（二〇一二年二月二九日確認）。また、日本では地球サミット二〇一二 Japanという組織が、その前身の活動開始時期かもしれないが、二〇一〇年一〇月から活動を始めているようで、独立行政法人等の補助金を得て展開しているとのことだ。そのウェブサイト http://earthsummit2012.jp/events/ では、ゼロ・ドラフトの日本語訳をこの組織による仮訳としてアップしている。このウェブサイトを見る限り、「グリーン・エコノミー」概念についての批判的コメントは読み取れない。このサイトに掲載されている「地球サミットリオ＋二〇の歩き方」という資料では、外務省その他のページへのリンクのみならず、ピープルズ・サミットの簡単な紹介をして、「（ピープルズ・サミットに）関心のある人は地球サミット二〇一二 Japanまでお問い合わせください」とまで表記されている。その一方でまた、「企業としてのリオ＋二〇の活用法」というページ http://earthsummit2012.jp/arukikata.pdf も設けている。

なおピープルズ・サミットのサイトは http://rio20.net/。

一〇 イカエの第二回世界大会（一九八一年 パリ）の大会テーマは「真の開発を求めて」だったが、そ

こに「真の」という修飾語が付くこと自体にその批判的視点が示されていたといえる。また、それ以前からも単純な「開発」理解には批判があったと考えられる。請われてイカエの初代会長になった、タンザニアのニエレレ大統領が、タンザニアの土着的な発想を大事にするウジャマという開発思想を提示したことが思い起される。イカエはその後、リオの地球サミットに向けて成人教育の分野での「環境教育」の運動を展開し、サミット後もしばらく積極的な活動を継続した。そのなかで「トランスファーマティブ」という概念を「開発」概念に替えて用いたこともある。この試みはトロント大学のオンタリオ教育研究所（オイゼ）のトランスファーマティブ研究所につながっていると思われる。ただし、現在のイカエの活動には、この流れが自覚的に受け継がれてはいないようにみえる。

一二 社会科学の研究分野ではかつて珍しくない議論であったが、最近、ほとんど耳にしなくなったように思われる。

一三 実は、世界社会フォーラムについては、日本国内での報道が少ないため、運動団体にも、現在でさえあまり情報が届いていないようだ。

一三 拙稿「国際成人教育協議会（ＩＣＡＥ）の課題意識発展の過程―成人教育運動の国際的展開に関する研究（一）―」『社会志林』（法政大学社会学部紀要）第五四巻 第三号（二〇〇七年一二月）参照。

一四 社会教育施設の有料化、社会教育施設からの常勤職員の教育委員会事務局への引き上げ、職員の専門性の否定等々に対し、これを批判する住民の「学習権」という主張が、安易に否定されかねない状況が生まれてきていた。バブル経済時の「生涯学習計画」施策とはうって変った状況であった。「住民参加」を否定できない自治体の政治状況にありながら、一九九九年には社会教育法の住民参加に関わる条項が「改悪」された。これらは地方分権推進策の中で進められたことで、そこには政府の財政削

減策が地方自治体に転化され、半ば強制的に進められていく動向があった。しかし、「国際競争」というイデオロギーが、「財政」の本質を議論することを阻み、この流れをくいとめる世論を高めることができず、そのなかで、人々の学習を広く支える施策が、軽視されはじめていた。またやがて二〇〇六年の教育基本法「改悪」につながる動きが、教育改革国民会議での「改正」論議等で胎動しはじめていた。当時、研究集会等で、「正論が通らなくなった」という嘆きを何回か耳にしたこともあった。

一五 実は、ユネスコ第六回国際成人教育会議（ベレン二〇〇九年）で、もたもたしながらも、国際的な運動から刺激を受けつつ、国内でそのような取り組みに挑戦した（詳細は拙稿「成人教育運動の国際的連帯―ユネスコ第六回国際成人教育会議に向けて―」（一）～（四）『月刊社会教育』二〇〇八年二月、二〇〇九年二月、五月、二〇一〇年五月号参照）。今まさに、その取り組みを次につなげ、発展さることができるかどうかの瀬戸際にあると自覚している。

一六 私はこの点に関わって、かつて『月刊社会教育』創刊三〇周年記念シンポジウム（『協同』と『連帯』の運動に学ぶ」一九八七年一〇月一〇日）に参加したおり、パネリストの一人、池上洋通氏（当時、自治体問題研究所）が語ったことをときどき思い出す。池上氏は、自分は行政職員の立場ながら「理想」を語っているが、本当は研究者にもっと「理想」を語って欲しい。それに対し、行政職員が実際にはこうだと批判するというのが本筋ではないか、というようなことを語っていた。この「研究者」に「教育者」を重ねてとらえることができるように思われるのだ。

一七 この講義のことを、自分が関わっているある市民運動の関係者に雑談でお話したことがあった。そのとき、その方は、今の大学では、「社会を変える実践」なんてことまで学生に、講義で伝えなければならないのねえと、長く市民の運動に関わってきた方ゆえの感想を語っていらした。

市場主義、新自由主義が人々の受動性を加速させているという、今回のフォーラム等で指摘されていたことが、日本において、一九五〇年代～六〇年代の時代経験と比較すれば、まさにその通りに展開しているということなのかもしれない。あきれられる状況であったとしても、そうした現実の中で、私たちは格闘しているのだ。

プロフィール　荒井　容子（アライ　ヨウコ）

一九八三年三月一橋大学卒。一九八一、八二年度藤岡ゼミ在籍。東京都立大学大学院人文科学研究科博士課程を経て一九九六年四月より法政大学社会学部助教授、二〇〇五年四月より教授。二〇〇四年四月～二〇〇六年三月トロント大学オンタリオ教育研究所客員教授として在外研究に従事。社会教育分野で国内の実践、運動、公民館、職員、法制度研究の他、近年は国際的運動の研究にも力を注いでいる。

問い続けるわれら　第二集

生涯学習人として生きる

二〇一二年四月一日　初版発行

発行　教育実践検討会
東京都国立市中二丁目一番地
一橋大学社会学部中田研究室内

タイトル字　平野甲賀
カバーデザイン　ドロー・ザ・ライン

ISBN978-4-9980640-1-5

©教育実践検討会